

佐々木俊介

—

私はこれまでいろいろの機会に、デューイの教育方法とその理論的根拠を明きらかにしようとしてきたが、その際、デューイの教育方法のもつ或る性格に注意をひかれてきた。それはどういう性格かというと、これこそがデューイのいう教育方法だという決定的なものが、なかなかひき出せないということである。一例をあげれば、彼は、教育は環境を通して行われなければならないという(1)。つまり、信念は直接的に生徒の中にハムマーで叩き込めるものではないし、態度はしつこく、いで塗り固めるように直接的に形成できるものではないから、生徒をとり巻く環境を整備することによって生徒を導いていこうというものである。これは一見、デューイ独特の教育方法のように思えるし、たやすく実践できそうにも思える。思いつくままに例を作りあげてみると、たとえば社会学で東北人の生活を教えようとしたら、教室の壁に雪が積もっている写真でも貼りつけておけばよいかもしれないし、理科で植物の生長を扱うときには、

黒板の前に何かの鉢植えでも置いておけばいいかもしれない。

しかし、問題はそう簡単ではないようである。なぜかというところ、デューイにあつては、或る人の環境とは、その人を物理的にとり巻いているだけでは十分ではないと考えられているからである。単に眼の前にあるのではなく、我々がそれに対して反応し、反応することによって変容を受けるといふような物事がその人のほんとうの環境だと、デューイは彼の著書のいたる所で述べている(2)。環境に対するこの考えは、デューイの考えの一つの中心をなすものであって、彼の経験主義というのはけっきょく、人間が環境と格闘しながら生き続けていく姿を描出し、これが人間本来の姿だと述べているにすぎない。そして知識とか思考とかいうものも、もともととは、この過程の中で生じ必要とされるものだといふわけ加えているのである。話を戻して先の例に帰ると、ここに重要な疑問が生ぜざるをえない。教室の壁に貼りつけた写真や黒板の前に置かれた鉢植えは、果たして生徒の(デューイのいう意味での)環境であろうか。生徒

はそれらに対して反応するだろうか。反応することによって自分が変容を受けるだろうか。一言にして、生徒はそれらと格闘するだろうか。

この問いに対する明確な答えは誰にも出せないであろう。この問いに答えを出すには、写真を貼り鉢植えをかざる際に教師は何をし何を言ったか、生徒はどういう地域社会に住んでおりどういう生活をしているか等々を知る必要がある。がそれを知っても依然として答えにくいことには変わりがない。もっと答えやすくするために、この問いを過去形にしなければならぬようである。もし何日か経ったあとでならば、ある程度はつきりした答えが出せるであろう。生徒が写真をきっかけにして東北の生活の研究にとり組むようになり、鉢植えによって植物の機構に対する眼が開かれたとすれば、それらはたしかに環境だったのであり、それゆえに環境を通して教育が行われたのであり、もしそういうことが起こらなかつたとすれば、定義によってそれらは環境ではなかつたのであり、したがって環境を通しての教育は行われなかつたのである。そして、環境を通して教育することがデュイイ独特の教育方法だとするならば、結果としてうまくいったように見える教育はすべてデュイイに基いたものであり、結果としてうまくいかなかった教育はすべてデュイイに基いていないということになる。そしてまたデュイイに基いた教育が行われるかどうかは済んでみなければわからないことになる。

環境の問題を更に複雑にしているのは、環境になり得るのは物理的事物だけでなく、「個人の必要、欲求、意図、能力と交互作用して経験をもたらすものは何でも環境であり」<sup>(3)</sup>、したがって想像の中での対象であっても構わない<sup>(4)</sup>ということである。環境をこのように、主体と働き合うものすべてと定義するならば教育は正しく環境を通して行われるに違いない。

けっきょく、デュイイの考えを忠実に実践しようとした場合、デュイイの理論は、どうすべきかを我々に指示してはくれず、いつても何かが終わったあとで「うまくいった」とか「まずかった」とか示してくれるにすぎないのではないか。私はここで一例として環境論をとりあげてみたのであるが、デュイイの教育方法には、たえずこのような性格がつきまといっているのではないか。また、そうだとしたらそれはどういう理由によるものか。この論文では、この問題を考えてみようとする。

いろいろのことが考えられる。デュイイが巧みに我々をたぶらかしているのだと考えられないこともない。また、彼の物事のとらえ方が生物学的次元にあるからだとも考えられる。これはよく指摘されるようである。人間と外界との働き合いという次元でとらえればあまり具体的なことはいえないかわりに、あゆるものを書きつけてしまいうことができるのである。しかし私は、デュイイ理論のこの性格は、パス以来のプラグマチズムによっているのではないかという

仮説をもっているのです、ここにその仮説を述べて批判をいただきたいと思う。

## 二

プラグマチズムについて述べようとするならば、まずパース、ジェームズの業績を十分に論じることからはじめなければならぬであろうが、ここではその余裕がないので、パース、ジェームズについては、ごく常識的な解釈だけで満足しておく。

### (1) パースの場合

プラグマチズムの源流となったのは、パースのいかにして我々の観念を明瞭にするか」(How to Make Our Ideas Clear, 1878) という論文であるとされているが、この中で彼は思考の役割りを論じて、おおよそ次のように述べている。思考は疑いがある、いらいらした状態によってひき起こされ、信念が得られたとき終わる。したがって思考の唯一の機能は、信念を産み出すことである。信念を産み出さないものは、どんなものであっても思考とは無関係である。それでは信念とは何であるかということ、それは、いらいらをしずめるものであり、我々の中に行動の規則つまり習慣を確立することを含むものである。信念の本質は習慣の確立にあり、異なる信念はそれが産み出す行動の、異なった様式によって区別できる(5)。もし異なるように見える二つの信念が異なった行動様式を産み出さないならば、互いに異なった信念とはいえない。しかるに単なる表

現上の相違を信念そのものの相異と誤って考えている場合がしばしばあり、無益な論争がくり返されることが多い。同じようにして、二つの語 (words) の文法的構造上の相違を、それが表わす観念の相違だと思っていることが多い。パースは以上のように述べたあとで、理解の高度の明瞭さを得る規則として次ぎのことを提案する。

「我々の考えの対象が (プラクティカルだと考えられる所の) いかなる効果を持っていると我々が考えているかを考察してみよ。そうすれば、この効果についての我々の考えが、対象についての我々の考えのすべてである。」(6) (Consider what effects, that might conceivably have practical bearings, we conceive the object of our conception to have. Then, our conception of these effects is the whole of our conception of the object.)

パースはこれを二、三の簡単な例に適用してみせている。たとえば物が「固い」とはどういうことを考えてみると、明らかに、これが他の多くの物によって傷をつけれないということを意味する。同じようにして、「重さ」ということは、支える物がなければ落ちるということを意味し、「力」は運動の変化をもたらすものであって、それ以上の何ものでもない。或る人が、「我々は力の効果はくわしく知っているが、力とは何であるかということは知っていない」と述べているが、これは自己矛盾である。力についてそれ以上何を必要があるだろうか(7)。

以上が How to Make Our Ideas Clear に現われたパースのプラグマチズムのあらましであるが、この考えを實際に巷に広めたのは、心理学者のジェームズであったといわれている。

## (2) ジェームズの場合

ジェームズのプラグマチズムは、パースのプラグマチズムをそっくりそのまま受けついでように思える。彼はプラグマチズムを説明するにあたって、パースの先の論文の内容をそのまま紹介しているからである(8)。そして彼は、このプラグマチズム理論を縦横に駆使して、当時の人々のディレンマを解決しようとする。物質的なものに依好する側面と宗教的なものに依存する側面のどちらを主としどちらを従とすべきかという問題に、ひとつの解決を与えようとしたのである。一例として、彼がプラグマチズムの理論を、唯物論と唯心論の対立に適用しているのを眺めてみよう。彼の論は次ぎのように展開される(9)。

この世界は盲目的な物質の働き合いによって動いているのか、それとも神の摂理によって動いているのかという議論が古くからなされているが、この問題にプラグマチズムの方法を適用してみると、この世界が物質によって動かされているのと精神によって動かされているとするので、現にどれだけの実際上の違いが生じるかを考えてみればよい。これを世界の過去だけについてみると、過去はすでに起こってしまったものであるから、それが物質によって

ひき起こされたものであると考えると、神の意志でひき起こされたものであると考えると、いささかの違いも生じない。したがって両者の争いは、まったく言葉の上での争いにすぎない。ところがひとたび未来を展望する段になると、様子が変わってくる。もしこの世が盲目的な物質によって動かされているとすれば、この世は遂にはほろびてしまうかもしれないが、神の意志が働いているとすれば、たとえ一時的には悲劇が起こっても、いつかは神の意志が成就されるに違いないと期待を寄せることができる。そして我々に及ぼすこの感情的な訴えの異なりに、我々が希望と期待においてとる具体的な態度の異なりに、そしてこの異なりにもなつて起こるあらゆる微妙な帰結に、唯物論と唯心論の真の意義がある。以上がジェームズの論のあらましである。この、態度としてのプラグマチズムが、更に真理観宇宙観へとつながることになる。

ここで気づくことであるが、パースのプラグマチズムとジェームズのプラグマチズムは、その定義においてはまったく同じような言語的表現をとっておりながら、その把握においては若干のずれが認められるようである。パースのあげている例を見ると、彼にあっては effect(あるいは consequence) というものが物が物に及ぼす effect として或るいはそれに準じて考えられていた傾向がある(自然科学的な色彩が強いといっているであろうか)のに、ジェームズにあっては、物が我々人間に及ぼす effect として考えられている

(心理学的色彩が強いといつていいかも知れない)傾向がある。しかし effect をたどることによって物事の意味を明確ならしめようという点では、完全に一致しているといつていいであらう。

### (3) デューイの場合

三番目に出てくるデューイはプラグマチズムをどのようにとらえたかを見てみると、その定義においてはやはりパースのそれと同じような言語表現をとる。「プラグマチックという語は、あらゆる思考、あらゆる反省的考慮を、その究極的な意味および検証のために、帰結 (consequences) に照らし合わせてみるという規則だけを意味する。」<sup>(10)</sup> しかし、デューイが更に続けていつている所をみれば、パースジェームズの場合よりもかなり広く解釈されていることがわかる。「この帰結の本質については何もいわれていないが、それは美的な質のものであつても、宗教的な質のものであつても、他のどんなものであつても構わない。この理論が要求するのは、帰結が何らかの形で思考の帰結であるということだけである。実際思考の帰結であるだけでなく、他のこととの関連において実行された帰結であるということである。」<sup>(11)</sup>

ところが不幸にして、彼自身がどのような問題にこの方法あるべきかという語には浅はかな誤解がつきまといつていて、プラグマチズムという語には浅はかな誤解がつきまといつていて、

この語を使うのを意識的に避けたが、思考の有効性を確かめるのにその帰結までたどつてみるという正しい意味でならば、この Logic の本はきわめてプラグマティックであると述べているが、彼自身は Logic に限らず、美的なものにおいても、政治的なものにおいても、更宗に教的なものにおいても、いつでもプラグマチズムの方法でもつて物事を吟味しながら思考をすすめたものようである。そして私は、先に述べたデューイの教育方法に特徴的な性格が、この方法の適用の結果として生じたものであると信じている。デューイにとって特徴的である性格がもつともよく出ていると考えられるものひとつとして、彼の宗教論をとりあげてみよう。彼の宗教論の論旨は次ぎのようである<sup>(12)</sup>。

現代は人間の心が二つに割れている。それは宗教についてであるが、宗教は伝統的には超自然的なものと結びついていた。ところが最近この宗教を捨てようとする者があつて考えが対立しだしたのである。そこで宗教を保持すべきか捨てるべきかについて論じてみよう。一般に宗教というものは、人生において安定感と平和をもたらす、調整方向づけを行うものと考えられている。過去においては、超自然的なものと結びついた宗教が人間にこれを与える役割りを果たしてきた。しかし現在では世の中が進んで、超自然的なものを素直に受け入れることはできなくなつてきている。そのため宗教を捨てようとする者が現われるわけだ。が、過去において宗教が我々に与えてき

たもの（安定感や平和）が我々にとって不要になったかというところ、  
けっしてそうではない。人生において安定感と平和をもたらす、調  
整方向づけを行うものは、我々にとって本質的に必要なものなので  
ある。しかるに既成宗教がこれを与えてくれない現在、どう考えた  
らいいのであろうか。私（デューイ）は次ぎのことを提案する。一  
つの宗教が我々に安定と平和をもたらすという叙述をひっくり返し  
て、我々に安定と平和をもたらすものを宗教と呼ぼうではないか。  
religion が我々に religious なものを与えるという叙述をひっく  
り返して、我々に religious なものを与えるものを religion と呼ば  
うという提案である。そしてこの提案を採択すれば、現代の我々に  
religious なものを与えるのは実は、実験科学の方法であること  
が知られるであろう。実験科学の方法を我々の生活のあらゆる領  
域に適用すれば社会は絶えず前進するという確信こそが、今日の我  
々の誰でも信仰でなければならぬ。彼の宗教論はこのように展  
開されている。

この宗教論にプラグマチズムの方法が使われているとはデューイ  
自身は述べていないが、観念、概念、思考を、そのもたらす effect  
あるいは consequence にまでたどってみてその有効性を探るとい  
う態度は、終始一貫維持されている。したがって、デューイ自身が  
述べているにかかわらず、ここにはパース以来のプラグマチ  
ズムの方法が使われているといつて差し支えないであろう。

### 三

ところでデューイのプラグマチズムを、パース、ジェームズの場合と更に細かく比較してみると、二つの点が特徴的である。まず第一にプラグマチズムの方法が適用されている範囲が人間生活のあらゆる事象にまで広げられていることである(13)。このことはいろいろ面白い問題をはらんでいると思われるが別の機会にとりあげることにし、ここでは特に第二の特徴に注目したい。

第二の特徴とは、デューイにあっては、effect を論じたあとで、その本来的 effect を（宗教論にあっては religious なものを）保存しようとするというところである。なぜこういう努力が必要になるかというところ、世の中は誰にも先が予測できないほど千変万化するものであるから、或るとき或る場所で或る effect をもたらしたものであっても、それが他のときに他の場所では同じ effect を持ち得なくなることが多いからである。そのため、もしはじめの effect が望ましいものである場合にはそれを保存するために、effect をひき起こす物事の方を意識的に努力して、適宜改変していかなければならなくなる。この、effect 保存への努力が、デューイ理論のもっとも大きな特徴であると私は思っている。

宗教に限らず、人間の生活のあらゆる領域で物事の effect が、時と所の変わるのにつれて変わるとすれば、同一の或るいは本質的に同じ effect を維持するためには、時と所が変わるに応じて物事

を変化させていかなければならぬ。effect を中心にして、この effect との力関係において、これをとり巻く物事が少しずつ變形したり部分的にあるいは全体が他の物事と入れかわったりしなければならぬ。或る effect を念頭におきながら、物事をずーずーとずらしていく状態が浮かびあがってこよう。しかしもしこの物事に、どこかで絶対的な権威が付与され固定化されると、effect のパランスがくずれてくることになるのである。

このことを宗教論にあてはめて説明すると、或る既成宗教が人間に対して religious な effect をもたらしている状態を最初の状態として設定する。この状態は或る期間はそのままで持続するが、そのうちにこの effect を妨げる要因が現われる。自然科学の発達によって超自然的なものの権威が失われたのである。そのため、もしこの宗教をそのままに固定化しておく、この宗教は安定ではなく混乱を effect としてもたらすようになる。物事が固定されると effect の方が変化するというわけである。初めの effect を保存するためには、既成宗教の古い要素を抜き去り、新しい要素を導入していかなければならない。或るいはまた、先の effect と同じ質のものをもたらす実験科学の方法と置きかえてしまふのがよい。だいたいこのようになるであらう。

ここでもう一言つけ加えておくと、この effect の変化は最初質の変化として現われ、理屈としてではなく質的感覚的にキヤッ

チされる(14)。それからなぜそういう変化が起こっているかを分析し、最後にそれへの対策をたてて一区切りの経験は終わりをつける。この経験の再構成をくり返すことよってのみ、religious なものは保たれ得ると考えられる。

さてそれならば、なぜデュイイがこのように effect にこだわらなければならなかったかが次ぎに問われなければならないが、この問題についてはこれまでに何回かふれたことがあるので(15)、簡単に要点だけを述べておこう。デュイイが effect にこだわるわけは彼が対決した当時の社会の中に見出だし得ると思われる。デュイイ自身の言葉を借りれば、彼は生活における古い要素と新しい要素との間に断絶があるという状態を改変しようとしたのである。そしてその断絶を分析した結果、それは過去において有効な effect をもっていた事柄が時のたつにつれてその effect を維持し得なくなってきた。にもかかわらず、肝心の effect の方は忘れてしまつて、いたずらにその形が、いにしがみつく人間が多いから、人間の経験がスムーズに行われなくなったのだという結論に達したのである。そこで人間に本来的な effect を念頭におきながら、物事の方を小刻みに改変していく状態が理想の状態として浮かびあがってくるのであり、これが彼のいうデモクラシーに他ならない。固定化、混乱、爆発のくり返しはデュイイがもっとも忌み嫌ったものである。彼が effect を強調する意図は、人間の本来的な営みを妨げる

要因をとり除くことにあったのだと私は解釈する。

#### 四

最初に提起した問題に帰ろう。さきに私は環境論を例にとりながら、デューイ理論からは、これこそが彼の目指す教育方法だという決定的なものがひき出しにくいといい、それはなぜであるかという疑問を出しておいたのであったが、その答えは、デューイ独特のプラグマチズムの方法がそっくりそのまま教育方法の領域にも持ちこまれているからである、ということになると考える。

環境の例でいうと、教室の中に持ち込んだものの本体が何であるかはプラグマチストの問うところではない。それが生徒にいかなる effect をもたらすかが問題なのである。生徒がそれと格闘するようなものであれば、鉢植えであっても、教師の話であっても、その他の何であっても構わないのである。これはちょうど、既成宗教がいかに壮大な体系を誇っても、effect がマイナスであればマイナスの意味しか持たないと断じたのと同じ論法である。問題は effect にあるのであって、物自体にあるのではない。プラグマチストは特にこの点を強調したいはずである。

しかしそうすると困った問題が起こる。それは、問題を論じる場合に物事の方から論じることができにくいということである。なぜならば、同じ effect をもたらすためには物事は時により場合によ

って変わるべきものだからである。たとえば宗教を論じる場合に物事の方から限定し論じていくと普遍妥当性をもたないかもしれない。そこで普遍妥当性をもたせるために、effect の方から限定していくことになる。しかし宗教教育を行おうとしている教師は、何をすればいいのかとまどいを感じてしまうであろう。かつては超自然的なものを教えればそれで済んだかもしれない。が、現在この場所ですべて生徒の中に religious なものを産み出し得るものはいったい何であろうか。自然科学の方法であろうか。教科の構造の把握であろうか。デューイ流に言えば生徒の中に religious なものをひき起こす教育を宗教教育という、ということになるであろうが、何がそれをひき起こすかという最終的な判断は各教師に一任された形にならないければならない。デューイの宗教論は、半分は effect の領域での宗教論であったのである。まったく同じようにして、デューイが環境について「個人の必要、欲求、意図、能力と交互作用して経験をもたらすものは何でも環境である」とか、「人間がそれと共に変わる環境が真の環境である」とかいうとき、彼が effect の領域で問題を論じていることは明瞭であろう。この場合も、何が環境となり得るかの最終的判断は各教師に一任されなければならない。眼の前の生徒の教育的環境となるべきものは、ひょっとすると我々の誰もが気がつかなかったものであるかもしれない。奇想天外な何か、あるいはあまりにも平凡で見落としていた何かが、教育的環境になり



得るかもしれない。このように彼の環境論もまた物事の領域ではなく effect の領域で論じられることが多いため、そこから具体的な教育方法がひき出しにくくなっているのであろう。そしてデュイがそうせざるを得なかった理由は、彼が固定化、絶対化、形式化を極度に恐れたからであると思われる。これが、冒頭に出した疑問に対して私が見つけ出した答えである。

## 五

更に若干の例を追加して論点を明確ならしめたいと思う。デュイの教育方法の格言のようになっていているものに、児童の衝動力を利用せよ、というのがある。「教師は船を運転する。しかし船を推進する力は学習者から出てこなければならぬ。」<sup>(16)</sup> 「児童自身の本能と力とが材料を供給し、すべての教育の出発点を与える。」<sup>(17)</sup> これは一見、物事の領域で論じられているように見える。したがって我々が簡単に応用できるように見える。が、デュイのいう衝動力（あるいは本能）とはいったい何であり、それを利用するのに我々にどんな手段が与えられているであろうか。デュイは衝動力の誤まった解釈の例としていくつかをあげている。数多くの理論家がいろいろな衝動力を数えあげているという。衝動力の本体として「自己愛」ひとつをあげる理論家があるかと思うと「恐れ」をあげる理論家もあり、人によっては五十から六十の衝動力を数えあげること

もあるが、デュイによれば、これらの人達はいずれも衝動力を正しくとらえていない。彼等は衝動力が一定の条件のもとで反応として形をとってあらわれたものを衝動力そのものと勘違いして数えあげているにすぎない。たとえば「恐れ」を強調した理論家は、当時の社会状態が反応として「恐れ」をひき起こす状態にあったということに気がついていない。以下同ようで、社会環境が異なるのにしたがってさまざまな反応がひき起こされたのである。我々は「……いろいろな異なった刺激条件に対して、それと同数の異なった反応が存在する」<sup>(18)</sup> ということを知らなければならぬ。衝動力の本来の姿は、これらいろいろに数えられているものの背後に、その根源として予想される「何か」なのである。「衝動力」という語は、何か原始的なもの、まだ漠然とした何か、まだ方向づけられていないもの、何か最初のものを示そうとする<sup>(19)</sup>。要するに、我々がどうしても存在すると考えざるをえないような生命力とでもいえるもの、反応のエネルギー源、そういう意味で無限の可能性を秘めた盲目的突進力とでもいべきものが、デュイのいう衝動力なのである。それならば、誰にも見えないし、さわってみることもできないこの「可能性」を利用するとは、具体的にはどういうことを指すのであろうか。どうやらこの衝動力論も、環境論、宗教論と似た性格を示してくる。

衝動力を利用するとは、何かを活動的にやらせることには違いな

いであるが、放り出しておい好き勝手なことをさせることではない(20)。教師の方向づけが欠けると生徒はくたびれるだけで、けつきよく何も残らないことになる(20)。生徒が喜んですることを教育的に方向づけることが要求されているのである。これは興味を利用するということであろうと考えてデュイの興味論に手がかりを探してみるが、彼の興味の定義がまた独特である。彼は、一定の向きに方向づけられた衝動力が、あげて或るひとつの対象に集中している(理想的)状態を指して、興味と呼んでいるのである。「……興味とは統一された活動を意味する。」(22)したがって努力とか紀律とかと裏表の関係にあるものであり、固定したものとしてではなく、働きとしてとらえられているものである。したがってまた生徒が単に「好む」ことが興味なのではない。生徒の興味は教師が長い間かかって見つけ出してやらなければならぬものだと考えられている。かくしてデュイの興味論も、多分に effect の領域で論じられていることが明らかなであろう。自分の生徒に何が本当の興味をもたらすかの最終的判断は、ここでもまた各教師に一任されているのである。

衝動力について述べられているいろいろなことを総合して、生徒の衝動力を利用するということの意味を翻訳してみると、「教育的な活動に生徒を没頭させること」となる。これはやや皮肉めいて聞こえる恐れがあるが、彼の衝動力に関する論述が、実は大部分

effect の領域で論じられたものであることを示すものである。デュイは衝動力が人間の生活の中で持つ意味を認識して、それが生活のあらゆる場面で保たれなければ人間性が失われてしまうと判断したに違いない。特に当時の学校ではこれがすでに失われかけていたと判断したのである。そのため学校の中にマニュアルトレーニングを導入することの意義を論じたのであるが、そのさい重要なのは、学校の中で編み物やぬい物をしたり、大工仕事をしたりすることではなく、それがもたらす effect (活動性) であるということもあわせて強調したかったはずである。ただ何か手足を動かさせればそれが教育的意味を持つと誤解されないためには、effect の方から限定していく必要があったのであろう。かくすることにあって、衝動力ひいては興味をひき起こすものは時と所によって当然変わるべきものであることに一般の眼を開かせたかったのであろう。(これは彼の作業論に通じている。) 宗教論における a religion と religious との関係が、環境論における environment と interaction との関係として、衝動力論における作業と interest あるが impulsive との関係として現われていると思えるのだが、いかがであろうか。

## 六

以上私は、デュイ理論から具体的教育方法がひき出しにくいのはなぜかという問題に答えるために、彼の環境論、宗教論、衝動力

論を例にとりながら、(1)プラグマチズムは物事の effect に注目する態度であること、(2)デューイにあっては、プラグマチズムの適用される範囲が、人間の生活の全事象にまで広げられていること、(3)デューイは effect に注目するだけでなく、人間にとって本来的な effect を維持することによって、生活つまり経験の再構成を円滑ならしめたいという意図をもっていたということ、(4)そのためには時と所の異なるに応じて物事を変えていかなければならないと考えられていたこと、(5)教育方法に関係するいろいろの概念が effect の領域で論じられていることが多いため、具体的な教育方法がひき出しにくいということ等々を指摘してきたつもりであるが、最後にもうひとつ同じような例として、彼の「進歩的教育」論を紹介しておきたい。これは Clapp とごう人の「The Use of Resources in Education (1952)」という本の序文として書かれたものからのもので、この序文は彼の八百余の著作の中の最後のものである。

「多くの異なった原理をもった教育運動が進歩的教育あるいは新教育という名で包括的に呼ばれている。進歩的教育に關していろいろの混乱が起こっているが、それは、新教育あるいは進歩的教育という語が、何か一つの実体を指す特定名であるかのような使い方をすることから生じる(以上要約)。……私は『進歩主義教育』および『進歩主義教育運動』という称号を、類名として使用するであらう。すなわち、教育の実際と理論を改良しようとする多種多様の努

力の全体を指し示すのにびつたり言語的手段として使用するであらう。」<sup>(23)</sup> ここにもデューイ独特の、effect から規定する定義が見られるが、その意図は、次ぎの文章に明瞭である。「どんな教育であっても、進歩しつつあるのでなければ進歩的ではないということ、当然のことであるべきはずなのだが、不幸にして、当然のことになっていない。過去のある時点では改良であったが現在ではかえって問題要因となっているような観念、原理、慣習、習慣、組織によって行きようとするほど、結果において反動的なことではない。その変化が、望ましい目的を実現するために起こされたものだということは、生活条件が、変化の前後において異なるということを意味する。その良い事を達成する過程で、新しい場が生じたのである。

……過去には存在したが現在では存在していないような事態のためにとられた改良策に盲目的にしがみつこうことは、現在の必要を見極めめることを妨害し、現在の必要が生み出す目的を視野から消してしまうものである」<sup>(24)</sup>。新しい場の中に生じた新しい問題は新しい目的を必要とするはずであり、更にまた新しい手段と新しい方法を必要とするはずだということである。ところが、「教員養成大学その他で、(デューイ等の提唱した——訳者註)諸観念、諸原理が、出来合いの規則から成る固定した教材に変えられてしまった。これを或る一定の標準化された手順をふんで教え暗記させ、あたかもからし硬膏をはりつけるように、必要が生じたら教育上の問題に外からあ

てはめさせようというのである。」<sup>(25)</sup> デューイ等の言わんとしたのは、人間の成長が停止し固着してしまわないための手段と方法を学ばせることであった。その手段と方法を固定させてしまつて教師から学生や生徒へと代々口伝えに伝えることに終始するというのは「観念の質は、最初からそなわつた、永遠的な、不変のエッセンスであるとする伝統的考え」<sup>(26)</sup>によつてゐるからである。「この考えによれば、進歩的教育の諸原理は『生まれつき進歩的』であり、これを暗誦できるものは、正にそのことによつて『進歩的』教師なのである。」<sup>(27)</sup>

ここで我々は、デューイが目指したのは、当時のアメリカのいろいろの局面での固定化と断絶をとり除くことであつたといふことを今一度想起したい。固定化や断絶は今の我々の眼の前に果たして存在しないであろうか。我々が宗教なり環境なり教育方法なり、またその他もろもろの事柄の本来的働き、そのひき起こす effect を忘れていたずらにその体裁にこだわりの絶対化しはじめるとき、それは進歩への赤信号を示すものであらう。

以上、論じ足りない点は多々あるが、デューイの教育方法の性格と、その性格が出てこなければならなかつた理由を、いくらかでも明きらかにし得たならば幸いである。

#### 付言

最後に一言つけ加えておくと、私は、デューイがすべてを effect の領域で論じたといつてゐるのではない。たとえば “The School and Society (1899)” に出てくるプロジェクトの例などは、明きらかに物事の領域で論じられたものである。ただそれと並行して、プラグマチストとしてのデューイは、たえずその effect に注目し一刻もこれを念頭から離し去つてはならないといふこと、またとりわけて effect に注目する理由は、彼が、絶えず前進を続けるデモクラシーの社会を夢見ていたからだといふことに注意をうながしたかつたのである。

#### 註

- 1 John Dewey ; Democracy and Education (1916), p. 13
- 2 たとえば p. 13, op. cit.
- 3 John Dewey ; Experience and Education (1938), p. 42
- 4 Experience and Education, p. 42
- 5 John Dewey ; Art as Experience (1934), p. 44
- 6 Charles Sanders Peirce ; How to Make Our Ideas Clear (1878), in “Philosophical Writings of Peirce”,

p. 25

9 p. 31, op. cit.

- 7 p. 35, op. cit.
- 8 W. James 著「ノランマティズム」(一九〇七) (梶田啓三郎  
訳、岩波文庫) 三八頁～三九頁
- 9 同書 七五頁
- 10 John Dewey ; An Added Note as to the "Practical" in  
"Essays in Experimental Logic" (1916), p. 330
- 11 p. 330, op. cit.
- 12 John Dewey ; A Common Faith (1934)  
以下の叙述は、この本全体の要約である。  
このことは宗教論を見ただけでは明きらかでないが、彼の他の  
著書から知ることもできる。
- 13 この問題については、これまでの私の質的思考理論に関する研  
究を参照されたい。「質的思考理論における質の性格」(日本テ  
ューイ学会紀要第五号)
- 14 「デューイの質的思考理論と教育方法」(東京教育大学教育学研  
究集録第三集)
- 15 John Dewey ; How We Think (1933, revised), p. 36
- 16 John Dewey ; My Pedagogic Creed (1897), Article I
- 18 John Dewey ; Human Nature and Conduct (1922), p. 132
- 19 p. 105, op. cit.
- 20 How We Think, pp. 273～277
- 21 同書 John Dewey ; Interest and Effort in Education  
(1913), Chapter 1
- 22 p. 15, op. cit.
- 23 John Dewey ; Introduction to "The Use of Resources  
in Education (1952)" in "Dewey on Education" edited  
by M. S. Dworkin, pp. 128～129
- 24 p. 131, op. cit.
- 25 p. 132, op. cit.
- 26 p. 132, op. cit.
- 27 p. 132, op. cit.